

Dystopic Future of Japan

黒き秘封の世界

執筆者:たいまん

ことのはじめ 序.事之始

今回は弾幕シューティングゲームを中心とする作品群『東方project』(以下東方と称す)の原作者である個人サークル・上海アリス幻楽団しゃんはい げんがくだんの同人音楽CD『燕石博物誌 ~ ドクター レイテンシース フリーク レポート』(以下『博物誌』とする)および『旧約酒場 ~ デートレス バー オールド アダム』(以下『旧約酒場』とする)の2枚を講評する。なぜ2枚同時であるか?その理由は単純で、作者の側から『博物誌』が表で、『旧約酒場』が裏であると明言されているためである。すなわち、この2枚は物語としても関連性が深いのである。

そんな2枚を別個で評価することも可能ではあるのだが、それでは本当の意味での評価は下せないと判断し、2枚を総合したレビューを書き起こすに至る。

以下が今回講評する2枚のCDのジャケット画像である。これらの画像は上海アリス幻楽団の主宰であるZUN氏のブログ (URL:<http://kourindou.exblog.jp/>) より引用した。左側が『博物誌』、右側が『旧約酒場』のものである。



起.円盤話

今回の2枚は「秘封倶楽部」という2人の女子大生から構成される京都のある大学のサークル活動を描いたものとなっている(以下本文においてはこの2人の女子大生をひっくるめて秘封倶楽部と称することとする)。

そんな彼女らは、『博物誌』では同人誌を執筆している一方で、『旧約酒場』では怪奇現象などに遭遇した者たちが夜な夜な集まっては意見交換をするという酒場に潜入する。

とだけ書けば裏の活動がOFF会みたいな表現になってしまうのだが、そんなことはない。

『博物誌』は秘封倶楽部の一方が語り手となり、もう一方が聞き手となって語り手が語ったことを聞き手が書き起こすという体をとって同人誌を作られていく様子が描かれている。この同人誌が『旧約酒場』の舞台となる酒場では有名になっているのである。秘封倶楽部の2人は同人即売会においてこの酒場のことを聞きつけて、ある目的を持った上で、乗りこんでいく。

これらCDにはブックレットが付いており、そこには曲の解説の代わりにショートストーリーが展開される。そこから東方の基本的な舞台となっている幻想郷の間接的な描写や、暗に現代社会への疑問の提起、そして何より主として秘封倶楽部の行動の軌跡の描写がなされる。

なお、『博物誌』は8枚目、『旧約酒場』は9枚目とそれぞれなっており、上海アリス幻楽団からは過去に7枚の音楽CDが出ている。そのいずれもが今回評する2枚のCDと同じような形態を採っており、なおかつ2枚目以降のCD全てに秘封倶楽部の2人が登場する。

また、これとは別に東日本大震災のチャリティーという名義でも、CDを出していたりする(ただし、このCDの再販は行われていないため、中古がプレミアム価格で出回っている)。

承.世界観

秘封倶楽部が登場している時代は、格安で月まで旅行できる程度の近未来であり、一説には今から約135年後とも言われている。世界人口は減少に転じており、資本主義は末期に差し掛かっているという国際情勢になっているとされる。

その頃の日本は人口減少のデメリットを回避し、勤勉で精神的に豊かな国民性を取り戻すことに成功したとされている(現代日本人は勤勉性においても海外の国々に劣るとされ、心の貧しさがしばしば問題視される)。そして量や速度が価値を失うほどまでに皆が物理的かつ情報的に裕福になり、格差社会が消失しているという(これは世界共通のこと)。しかし同時に、秘封倶楽部が生きている時代の日本は反理想郷(ディストピアのこと、理想的な社会のことを指すユートピア(理想郷)の対義語)と称するに相応しい、^{えんせいかん}厭世観が支配的な社会となっているのである。しかも、ごく一部のエリートが上層部を占めている分担社会と化しており、現代では論外とされる選民思想が再び大手を振っているのである。

たとえば、不治の病はなくなったとまで豪語されているものの、対処できないようなものをサナトリウム(療養所)に隔離しているという実態がそこにはある。その実例として、秘封倶楽部の一人が地球には存在しないウイルスを原因とする^{さんもつ}譫妄(錯覚や幻覚が頻発し、意識障害を伴う状態にある病)と診断され一か月間、信州(長野県のこと、^{りつりょうせい}律令制における旧国名の^{しなののくに}信濃国から)のサナトリウムに抑留された過去があるのだ。

また、原因は明示されていないが、結界の謎を暴くことも政府から禁じられているとも言われている。

そして、裏に相当する『旧約酒場』においても日本社会が徹底した管理社会であることを窺える文言が存在するのである。しかも『旧約酒場』における設定状況が状況だけに、「訳アリで集まっては上層部に漏れると不味いことをやっている」という雰囲気^{かみ}を醸し出している。具体的な内容の明記はここではしないが、想定される典型的なディストピア社会においては、よくあることとだけは言っておこう。

少なくとも、自分はこのような社会に生きたいとは思わない。技術などは現在よりも遥かに進んでいるかもしれないが、心の^{ききん}飢饉が相変わらず解消されていないのではないかと思うと、ぞっとしないのである(感心しない、面白くないという意味)。

転・収録曲

収録曲は2枚併せて合計21曲である。今回のCDのために新たに作曲されたものはもちろんのこと、既存の東方作品初出のセルフアレンジ曲が多数収録されている。既存曲の選曲はディストピアの様相を呈する世界観に合った選曲がなされ、そこからショートストーリーが構成される。

先ほど、自分はディストピア社会を実際に生きたいとは思わないと書いたのだが、そこから奏でられる音色には思わず聞き入ってしまうのである。

特に自分が印象に残っている曲は『博物誌』のトラック2『凍り付いた永遠の都』である。ブックレットにて付けられたサブタイトルが『Unstained Dystopia』となっており、正に秘封倶楽部が生きる未来の日本社会は正にディストピア社会であるということをはっきりとタイトルの時点で明言しているのである。当然、表向きは現代と比べてかなり豊かになっていることは容易に想像できるのだが。

この曲はセルフアレンジ曲で、初出はゲーム『東方紺珠伝 ~ Legacy of Lunatic Kingdom』(以下『紺珠伝』とする)である。『紺珠伝』では「月の都」という月にある実在しない都市が舞台の一つとなるのだが、この月の都も豊かで不老長寿を実現している一方、上層部が賢者と呼ばれる者で占められ、情報隠蔽を行い、被統治者の殆どを取り替えの効く道具扱いしていると反理想郷社会の状態にあるのである(但し『紺珠伝』ではある理由で、一時的に月の都は人気のない場所となっている)。

「醜すぎる暗黒面をひた隠しにせん」とばかりに奏でられるメインメロディーとは裏腹に、お洒落でありながら隠しきれない反理想郷の狂気を醸し出したピアノが中々に印象的なのである。そしてピアノのメロディーは東方の作品群でよく見られるフレーズが使われている。

そんな中で、自分は「一寸先が闇であったとしても、それでも往くしかない」と思うに至るようになった。それは恐らく、『紺珠伝』をプレイしていた影響もあるだろう。実際、ゲーム中に「この先待ち受けているものが悪夢だとしても、それでも私は行くしかない」という台詞が出てくる。そして最近では現在を全力で生きるように心がけようという決心がつくようになっていたりもする。

結・総合評

ディストピアが具現化した近未来の日本、そこから奏でられる調べには不気味なまでに綺麗すぎる表の顔と、怪しすぎて却って関心をそそる裏の顔を垣間見ることができる。表の顔というのは皆が手放しでそうだと認めるような側面のことである。その一方で裏の顔とは月並みの反理想社会の構成員ならば、目をつぶりたくなるような社会の闇のことを言う。

そして秘封倶楽部の片割れが現実と認識する別世界、即ち東方の舞台である幻想郷は反理想郷と化した日本とは別の世界として、しかもそんな日本とは真逆の理想郷の様相でもって映し出されている。

理想と反理想、表と裏…… その対比の深さと深みを増幅させている所以を知ることによって更に楽しむことが可能となり、そして更に掘り下げて、あるいは主語や状況などを変えて考えるということも可能となる。

音楽を純粹に楽しみ、そしてブックレットから音楽の背景を知っては再び楽しみ、そして考察をしては再び聴く…… そうやってまた違った感覚で入ってくる音を楽しむ。そうした音楽の鑑賞の仕方というのも良いのではないかと思わせてくれる。どのような考えを音楽に付き合わせて鑑賞するか、これでも十分感想が変わってくるし、得られるものも変わってくる。

そして、秘封倶楽部を主役とするCDはこれら以外に6枚ある。それらも併せて聴いてみるということを是非ともお勧めしたい。そうすることで、今回紹介したCDの収録曲の印象も変わってくる。そして秘封倶楽部を通じて描き出される幻想郷や未来の世界から「我々はこれからどこを目指していきたいのか？」という正解のない問いのヒントを見出してほしいと願うばかりである。

そういう点でいえば、「自分達にとって理想的な社会、生き方とは」ということを、音楽を通じて考えるには打ってつけと言うべきであろう。

終. 独白書

はじめ、自分はディストピアについて専ら語ろうかと考えたが、途中で書いている内容がWikipediaのリライトでしかないということに気が付き、執筆を中断した。

リライトを止めたのは良かったものの、何を書くべきかに悩み、途方に暮れた。そこでふと、なぜディストピアを語りだそうと思いつき起こしたのかということ想起したのである。

その結果、この2枚のCDで描かれている日本の未来がディストピアの様相を呈しているので、ディストピアについて何か書こうと思いついたからに他ならないという結論に至り、それらのレビューに執筆する内容を変更したのである。

自分は元より「今の人間はディストピアをこそ創れるだろうが、ユートピアを築くことは不可能である」と割り切っている。自分は人間の低すぎる可能性に対して深く失望しているという事実があり、「ディストピアの実現は時間の問題」とさえ思っている節がある。そこから自分は隠遁いんとの道を志望しようとした過去もある。

今ではやっとのことで自分の現実と向き合う努力をしている。それでも厭世観を拭き切れていないうえに、未来を想定すれば、否が応でも悲観的になる。自分を含めて「世界は自分を中心に回っている」と思い込んでいる人間の多さも理由の一つだが、「無能のままでありたかった」という思いもある。そんな思いを消したくて、現実在即して「これからどうなっていくのか」を思うことを止めにするという決心を下したばかりである。そして何より自分はこれ以上、足踏みをしているわけにはいかないのである。

思考を重ねて、自分の生活様式を見返すに至って、一方では何かを始め、一方で何かを止めるという決断を下して生活に反映させるというのも一つの手なのだがこの文章を書いてつくづく思った。今回のCDによる音楽鑑賞は思案のきっかけでしかなかったのかもしれない。

だが、それでも構わない。なぜならば、全ては「幸せに生きるとはどういうことなのか」という問いに直結しているからである。

「楽をして生きるには」という問いには99%答えが出ているも同然である。そこから科学技術などが発達したのだから。では、「幸せに生きるには」という問いはどうか？今回紹介した2枚のCDでこの問いについて考察する動機を作ってはどうか？